

障 害 L9018

Yes-No質問に対する自閉症児の応答反応

徳井千里

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

＝ 問題 ＝

コミュニケーションの質的障害は、自閉症の診断基準を構成する中心的な特徴のひとつである。本研究では実際のコミュニケーション場面において、自閉症の子どもにとって特に困難なのは何なのかを具体的に示すことを目的として、簡単な質問場面での応答の様子を、自閉症児と自閉的傾向のない発達遅滞児とで比較する。

子どもたちは絵を見せられながら、「これはりんご?」というような質問に答えることを要求される。それには相手の問いを受け止め、目の前の状況と自分の既有知識をすりあわせて判断し、適切なかたちで返していかなければならない。自閉症の子どもたちには、こうしたコミュニケーションを規定する暗黙の原則が理解できにくく、独自のやりかたで対処することが予想される。

＝ 方法 ＝

【対象児】 MAが2;7-3;10の自閉症児と自閉的傾向のない発達遅滞児。群構成は表1の通り。

【課題項目】 絵刺激-質問のラベルの組み合わせが、[既知-既知] リンゴ-リンゴ(正) ミカ-カ(誤)、[既知-未知] ママ-ママ(無意味)、[未知-既知] 架空の図-ハナ、[未知-未知] 架空の図-ハナ(無意味)、になっている5項目。

【手続き】 絵刺激を1枚ずつ提示しながら、「これはリンゴ?」「これはミカ?」と尋ねていく。

【反応の分類】 Yes...うん・そう・肯定動作。
No...ちがう・そうじゃない・否定動作。

Naming...絵刺激をネーミングして応える反応。

DK...わからない・なんだろう・疑問動作。

Echo...質問中のラベルを繰り返す反応。

Foul...質問を聞く前から、自分のペースで命名するなど問いに応じていない反応。

表1
被験者群の構成

群	n	MA		CA		IQ	
		Mean (Range)	(Range)	Mean (Range)	(Range)	Mean (Range)	(Range)
Retarded	14	3;3	(2;9-3;10)	6;2	(4;6-9;8)	57.9	(43-75)
Autistic	10	3;2	(2;7-3;7)	7;11	(5;5-11;11)	46.2	(30-60)

＝ 結果と考察 ＝

各群におけるそれぞれの応答反応の生起率を、項目別に表2に示す。反応がなかったカテゴリーを除いて、両群の反応の生起頻度について χ^2 検定をおこなったところ、4項目で有意な偏りが認められた(表の上から順に、 $P<.03$, $P<.05$, $P<.01$, $P<.02$, $P<.10$)。自閉症児群と非自閉的遅滞児群では、多くの項目で、応答のしかたが異なっていることが示唆された。

自閉症児には、この課題場面でのコミュニケーションが相手の問いを待つてそれに応じるという枠組みであること自体、理解しにくいようである。絵刺激が既知の項目では、問いに構わず命名してしまう<Foul>が大体半数を占めている。そして問いを待ったとしても、本来要求されている<Yes>や<No>で答える反応はほとんどなかった。そして絵刺激が未知で命名できなくなると、問いに含まれたラベルを繰り返す<Echo>で答えるようになる。遅滞児群のこどもが、正否はともかくもやりとりのルールにのっとって、<Yes><No><DK>できりぬけようとしているのとは対照的である。

しかしこうした特徴的な反応の仕方は、自閉症児におけるコミュニケーションの難しさを示すものであると同時に、やりとりの原則を理解できにくいなかで、彼らなりに他者からの要請に対処しようとしたあらわれであるともいえるだろう。

表2
被験者群ごとの各応答反応の生起頻度(%)

絵刺激ラベル	群	Yes	No	Naming	DK	Echo	Foul	他
リンゴ 既知 (True)	遅滞児	◎ 50.0	0	○ 42.9	0	0	7.1	0
	自閉児	10.0	0	40.0	0	0	50.0	0
ミカ 既知 (False)	遅滞児	7.1	◎ 28.6	○ 57.1	0	0	7.1	0
	自閉児	0	0	40.0	0	10.0	50.0	0
ママ 既知	遅滞児	0	◎ 28.6	○ 64.3	0	0	7.1	0
	自閉児	0	0	10.0	0	30.0	60.0	0
? 未知	遅滞児	0	◎ 35.7	○ 14.3	0	21.4	0	28.6
	自閉児	0	0	0	0	80.0	0	20.0
? 未知	遅滞児	28.6	7.1	0	◎ 14.3	28.6	0	21.4
	自閉児	0	0	0	0	90.0	0	10.0

* ◎...問いに的確に答える応答
○...通常のやりとりの中で許容される応答